

オレの挑戦をJAが 応援してくれない？ 主役はきみ一人じゃない。 だから仲間をつくらうよ。



「オレは珍しいイチゴの生産にチャレンジしているんだけど、JAに生産部会はなく孤立無援。だいたいJAって新しいことに消極的だよな。」

消費者のニーズも多様化しているので、新しい品目や販路など、新しいチャレンジをはじめると、一人の力は限られています。仲間が集まって力を合わせるから、目標も達成できるのです。仲間を作ることは決して古くさいことでもかっこわるいことでもありません。会社を意味する「カンパニー」の語源は「仲間」、協同組合の「コープ」は「力を合わせる」です。何かを実現しようとすれば、仲間づくりが大事なんです。せっかくJAがあるので、JAを活用して目標を実現してほしいものです。

とはいえ、新品目や新販路だと、JAに生産部会もなく孤立無援、といった状況も多いでしょう。JAは組合員が主役の組織です。ですから当然、JAは組合員の取り組みを応援すべきです。ただし、主役は一人ではない、ということ。みんなが等しく主役なのです。だから、JAがどのような事業を行うかは、組合員間の意見調整が必要になります。新品目や新販路をJA

の事業の中に位置づけてもらうには、それなりの努力が必要です。

そもそも、今ある部会も最初からあったわけではありません。たくさんの部会ができてくるのは、戦後の高度経済成長期。都市での農産物の需要が増えて、各地で産地づくりが進みます。JAグループも「営農団地構想」を打ち出して、生産者の作目別のグループづくりを応援しました。

それだけではありません。生産者が自主的に組織をつくって、生産技術の研究をしたり、市場調査をしたりする活動が活発でした。みなさんの先輩たちは、仲間と一緒に学び、技術を向上させ、販路を開拓していったのです。

ただ、その頃に比べて今では、農業を志す若者は残念ながら少数派。だからこそ、若手農業者の横のつながりが必要なのですが、人数が少ないだけに、JAに声が届きにくくなっているのも現実でしょう。

「どうやって人を集めるんだ？」「今ある生産部会って親父の世代の発言権がでかくて、若手や新参者の意見なんか聞いてくれやしない」という声も耳にします。経験を積んだベテランの意見は重要ですが、若手が萎縮していたら何も変わりません。モチベーションを高めて、JAの中で声を上げていくことがその第一歩です。

「部会員の約七割が新規就農者」という生産部会があります。鹿児島県のJAをお鹿児島ピーマン専門部会です。地域は冬春ピーマンの一大産地でしたが、燃料費の高騰や価格の低迷などで栽培を止める農家が続出。そこでJAは行政と連携して産地の再生に着手しましたが、

06年には新規就農者の数が既存の部会員の数を上回ります。

その新規就農者ですが、ほぼ全員が農業未経験者。これがよい方向に働きます。部会でK-GAP（かごしまの農林水産物認証）を取得。GAP（農業生産工程管理）の認証を取得するには複数の要件をクリアしなければならず、煩わしいと感じる農家も少なくありません。新規就農者はこれを当然のことと受け止めたのでした。

部会内には「技術開発研究会」が設置され、新しい技術の実証が行われれば、部会全体で共有されます。コストがかかる冬の燃料費。そこで技術開発研究会内にヒートポンプの研究班をつくり、コスト削減効果を研究。三年ほど設置可能なハウスにほぼすべて普及できたそうです。

大事なことは、青年農業者が仲間を作って、学び、力をつけること。自分たちが実力をつけなければ、耳を貸してもらえないのは、どの世界でも同じです。

JAは青年農業者が集まれる場をつくり、勉強や交流の機会をつくるのが何より必要です。部会の先輩たち、JAの役員は頼れる相談役になってほしいと思います。



著者
増田 佳昭
（よしだ けいさく）

滋賀県立大学教授。専門は農業経済学、農業協同組合論。